

サマー

佐々木美代子



新潮社版

佐々木美代子（ささきみよこ）

1940年 神戸生れ

1968年 早稲田大学ロシア文学科卒

1974年 『夏の園』（私家版）

1978年 『ドストエフスキーへの旅』（新潮社）

インディアン・サマー

昭和五十四年一月一〇日印刷

昭和五十四年一月一五日発行

著者 佐々木美代子

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話（業務部）03—二六六—五二二—

（編集部）03—二六六—五四二—

振替東京四—八〇八

印刷 東洋印刷株式会社

製本 植木製本株式会社

定価 九八〇円

© 1979, Miyoko Sasaki
Printed in Japan

（乱丁・落丁本は、ご面倒ですが本社通信係宛お送り）
（下さい。送料本社負担にてお取替えいたします。）

《目次》

第一章	早春	5
第二章	インディアン・サマー	51
第三章	試みの日月	128
第四章	かなしみの歌	188

装画||三尾公三

インディアン・サマー

第一章 早春

1

二月最後の日、諒子は、久し振りに公園へ行ってみた。

この前に来たのは、昨年の秋の終りの頃だった。あの晩秋の午後、諒子は、湿った落葉を踏みしめながら、大きな池の周りを、たっぷり時間をかけてひとめぐりした。そして、池の中にしつらえた噴水が大きく円形に放出しつづけ、晩秋の燦したような陽光を享けて燦めくさまを、長い間、放心したように眺め入った。吹き上がり、白く輝きながら四方に散乱していく水の夥しい流動は、諒子に羨望に似た気分を起こさせる。

絶え間なく湧き出るあの水の飛沫のようにも、自分の内部から言葉が奔出してこないものだろうか。思念が、あの水しぶきのように、躍動して溢れ狂ってほしい……。諒子は、ここしばらく、澱んだまま静止している自身の内部の池を覗き込み、そんな半睡の水溜りに、波紋を生じさず石を投じたい、掻き回して波立たせ、言葉という水しぶきを内部から外へ向けて奔出させてみたい

と、強く念じた。

二月末の公園内は、いかにも寒々しかった。脱色されて枯れた風景が、冷氣の中で凍てついていた。そんな色彩を失った拡がりの中で、灰色の裸身を晒した落葉樹が、梢を曇り空に向けて茫々とさし伸ばしている。時折、犬を連れた厚着の老人や、自転車を乗り回す少年とすれ違う。冬の公園は、ごく近辺の住人の迂回路になっているだけで、冬眠の素振りをしたまま鎮まっていた。乾いた土を踏んで、いつものように池に沿って歩みながら、諒子は、もう一か月余り逢っていない秋野のことを考える。今夜あたり、秋野が訪ねて来るような予感があった。この諒子の予感には、程度の相違があり、かすかなものから、確信に近いものまで、何通りかのかたちがあった。秋野と関わりを持って現在に至る七年間に、諒子がひそかに修得した予感の多様なかたちであった。この日の予感は、ほぼ確信に近かった。

ごく近いうちに秋野が訪れてき、ひととき二人だけの世界に浸れるという確かな予感は、いつもながら諒子を温もった期待感で包む。この期待感は、秋野が訪れたとき、大抵飽和に達している。期待という言葉は、怨みという言葉にも置き換えてよかった。秋野を飲んで迎え入れる気分の内側に、会わずにいた月日の中で堆積され、徐ろに燻りはじめた怨嗟の思いも、ぴったりと貼り付いてあることを、諒子は、当初から自覚していた。

こうして公園に来たのは、自分の生活に小さな区切りをつけるための儀式みたいなものだった。昨年の暮に翻訳の仕事が舞い込み、それを丸二か月かかりきりになって訳了し、四日前にその清書原稿を本来の訳者に渡したのである。つまり、翻訳といっても下請け作業でしかなく、アメリカでいささか評判になった大衆小説の下訳を回されただけのことだった。

四百枚に達する原稿を多忙な翻訳家に提出した日、諒子は、その足で渋谷へ出、かねてより噂の高いハリウッド製女性映画の二本立てを觀、三十歳を過ぎてなお独身であることに幾許かの励ましと痛快感を与えられ、機嫌よく宵闇の街へ出た。駅近くで立ち寄った書店で、彼女は、新刊の小説を四冊買いこんだ。三日かけて、諒子は、四冊の小説を読み上げ、二か月間横文字に難渋させられた憂さを、楽な縦文字によって解消させ、ついでに二か月分の時代遅れを取り戻した。

公園へは、噴水の水しぶきを見るために来たのだった。他人の作品に関わりあっているうち、自身の文を何か書き上げたいと願う気分が、自然に生じていた。昨秋に捉え損ねた思念が、奔出する水しぶきを眺めることで、不意に言葉にして掴み取れるかもしれない。そうならなくとも、ただ躍動する水を眺めつづけている内に、澱んだ鬱屈が洗い流され、気分は何らかのけじめがつけられるように思われた。

噴水は、止められていた。

噴水の仕掛けのある三箇所は、いづれも濃緑の水面が静止し、その近くを水鳥が数羽侘しげに浮いている。諒子は、軽く失望し、コートの前を立って佇んだ。人の訪れぬ公園で、噴水が気前よく乱舞するはずもないのだ。悪寒が足許から突き上げてき、彼女は身震いした。踵を転じながら、小さく苦笑する。書きたいものをまだ掴んでいない焦慮が、こんな冬眠中の場所に自分を運ばせたのかという仄かな自嘲があった。

諒子は、公園に見切りをつけ、街に出て行った。

公園から歩いて五、六分の街なか、国電の高架下を抜けて二筋ほど入った小路の中ほどに、白

い五階建てのビルがあり、その二階の一隅に小さな名曲喫茶がある。諒子は、公園へ来た日は、大抵帰途その店に立ち寄っていた。寒々とした公園で外気に身を晒したあと、温もった喫茶店に籠もり、熱い珈琲を飲みながら、偶然に出くわす音楽を聴く……これは、空白の半日の過ごし方として、諒子には居心地のいい形態だった。

店の扉を押し開けると、一つきりのガス・ストーヴで暖められた店内の濃い空気が、諒子を包みこんだ。先客は、二人だけだった。諒子より年長らしい女主人が、見知った顔を迎えるときの無言の微笑を浮かべた。

「こんにちは」

諒子は、小声で、いつもそれだけの言葉をかける。顧客らしい狎れ合った会話というものを、彼女はひどく嫌っていたので、どんな場所でもこの姿勢は崩さない。それから一番隅のテーブルに向かい、コートを脱いで坐ると、壁にもたれかかり、店内を見回した。

こういう沈黙を強いられた名曲喫茶には、いつもながら入った瞬間と席を立つ瞬間に、軽い滑稽感が走り抜けてしまう。複数の他者と共に音楽に陶然とするという行為の気恥ずかしさや抵抗の気分が、諒子を捉えてくる。確かに、オーディオルームとなった小さな店内には、どこか教会の小さな礼拝堂に似通った雰囲気がある。奥の祭壇があるべき場所に、ステレオの巨大なスピーカーが二対据え付けられ、信者ならぬ音楽愛好家たちは、それに対座するように一人一人別れて坐り、無言の姿勢で、神の声ならぬ音楽に耳を傾け、かつ身を委ねている。そんな姿には、信仰者を想わせる神妙な身構えの気配もあって、外から飛び込んだ瞬間の諒子をたじろがせる。

注文した珈琲が諒子のテーブルに置かれたところで、それまでかかっていたブルックナーの長

大な交響曲がようやく終った。一時間余りにわたってこの部屋を充たしていた音がぶつりと消滅したとき、無音そのものが、深い安堵の吐息となって感じられる。が、またすぐに、針がごとんと置かれ、盤の上を滑走しはじめた音が、耳を撫でてきた。どうか、今度は、あのように長々と勿体振った曲でありませんように……。

遠くから素早く駆けこんでくるように軽く、快く、弦楽器が鳴りはじめた。一瞬の内に、諒子は、その旋律の馴染み深い響きを受け入れ、身内に安らぎの感覚を拡げていく。ト短調の弦楽五重奏曲だった。プレイヤーの傍にレコード・ジャケットが立てかけてあり、脇の小黒板には、「K 516、アマデウスQ」と右下りの字で記してある。ジャケットの絵模様は、諒子が持っているレコードと一緒だった。四、五年前に購ってから、もう幾度かけてみたか知れないほどだ。音のはじまりからごく自然に安らぎを味わったのは、駄が、その曲を覚えこんでいたためなのか。

けれども、今はじまったばかりのこの音、祭壇を想わせる巨大なスピーカーから響き出るこの音量の豊かな重さは、やはり諒子を圧倒してしまふ。熱い珈琲を一口啜ったとき、口中に拡がった香りと共に、静かな幸福感が、不意の恩寵のように、諒子の身内を貫いた。

諒子は、煙草に火をつけ、煙を吐き出しながら、その行方をぼんやりと追う。指の間から立ち昇る青い煙のたなびきは、憂愁と明朗の交錯する旋律に合わせて舞っているかのようだ。この煙のゆらめきのように、言葉が、いかにも気まぐれな形で、不意に湧き出てこないものか……と、またも思いはじめた。この煙の仄かな乱舞が、もし言葉そのものであるなら、今どんなことを呟いているところだろうと、遊ぶように空想してみる。

……少しも焦ることなどないのだ、現在自分に必要なのは、こうして飽きがくるほどぼんやり

と意識を宙に漂わせておくことなのかもしれない。そうしていると、あるとき、ふと思念の端くれが覗き見えてき、そこから言葉が徐ろに出てくる……これが、いつもの自分の流儀だった。今度も、この手で行くしかあるまい。

二時間近く沈没していた喫茶店を出ると、外はすでに昏れなずんでいた。駅前通りに出ると、勤め帰りの人としきりにすれ違う。そんな足早な人波に逆らうように駅へ向かいながら、諒子は、今日一日をただ漂うように過ごしたことを納得する。一まとまりの仕事を終えたあとは、ひととき浮遊人間になりきって、時の流れの中で無為に漂うのが衛生上好ましいと、ここ数年決めこんでいた。

駅ビルの中にある大書店で、諒子は、二十分ほど立ち読みし、その申し訳に文庫本を一冊買ってから、ホームに立った。

ラッシュ電車の人込みにもまれ、三つめの駅で下車したときは、彼女は、すっかり勤め帰りふうの足どりとなり、人波に吞まれて歩き、独り住居のアパートへ戻って行った。

その夜、買ったばかりの文庫本を半ばまで読んでいた十時過ぎに、秋野が、ふらりと訪ねてきた。

「やっと暇が作れた……」

玄関口で靴を脱ぎながら、秋野は言う。

訪れたとき、大抵開口一番に、こんな弁解じみた口調になる癖を、秋野自身は気付いているのだろうかと、諒子は、内心で苦笑する。「いやあ、もう無茶苦茶に忙しかった」と派手に煙幕を

張るか、最初から低腰に「約束を遅らせて、ごめんなさい」などと言いながら上がってくる。諒子には、こんな秋野の言い訳や済まなそうな表情というものが、実は、彼流儀の単なる挨拶、照れを隠すために、最初の応対としてすっかり調法している、秋野一流のポーズに思える。

「元気にしてた？」

これが、二番目の挨拶だ。そして、この一言によって、飽和に達していた諒子の怨みがましい気持は、一挙に解きほぐされ、秋野の訪れ方の巧みさに、いつもながらすっかり懐柔されてしまう。「まあ何とか元気だったわ」

秋野をたちまち赦してしまふ気分に対抗するように、言葉だけは、気難しく応じていた。

「でも、元気で退屈するのは、いや」

秋野への咎めをこめて、詰る口調になる。

「退屈なくらい時間があるなんて、羨しいよ。毎日、何してるの。あの仕事、もう終わったんでしょ」

「ええ、四日前にね。しんどかった。それからは、映画観たり、本読んだり。今日は、電車に乗って公園へ行ってきたの」

「優雅だねえ」

「見たところ、有閑マダムか、お金持の二号さんみたいでしょ。わたしの場合、出資者もわたしってことだけど」

諒子は、秋野の脱いだコートを手ハンガーに掛けながら、「何か飲むでしょ」と問う。

「さっきまで、人ちょっと飲んでたの。薄い水割りでもいいよ」

諒子は、台所へ立ち、二つのグラスに水を半分入れてから、テーブルに並べる。食器棚からウイスキーを取り出し、水の上に注ぎながら、「寒いから、氷でなくてもいいでしょ」と、押しつけがましく弁解した。テーブルに向かい合って坐り、軽くグラスを掲げ合い、無言の乾杯をする。「さて……と」

一口飲んだグラスを二人同時に卓上に置いたところで、諒子は、からかう表情になって口をきる。

「五週間ぶりね。その間の分だけ、いっぱい文句を並べたてようかしら。順に整理しとくんだった。でも、大学は、今が一番忙しい時期だって分かるから、文句が言えないな」

「そうなんです。殺人的だったよ。まだ当分続くんだけど」

秋野も、笑いながら応じる。

いつごろから、こんなふうにお互いを素早く赦し合い、会話に角のたつことがなくなったのだったか。少なくとも、付き合いだした当初の二年間は、こんなものではなかったと、諒子は思い返す。

「仕事は、巧くいった？」

「さあ……、ただの下請け作業でしょ、責任ないものだから、気は楽だったけど、気乗りしなくて。でも、お蔭で、むらむらと自分のものが書きたくなってきた」

「そうだろ、な。それで、何かテーマ見つけた？」

「いえ、今、探してるの。というか、待ってるの」

「書くものが、向こうから来てくれるのか、いいなあ」

諒子は、いささか思いつめた表情になり、秋野の目を捉えながら、口に出してみる。

「わたし、恋愛小説を書いてみようかしら」

秋野は、煙草に火を点け、一吹き煙を大きく吐き出し、笑い声で言う。

「やっとその気になってきた？」

「ええ。今まで、避けていたでしょ。でも、自分の年齢のこと考え出したの。三十代でなら書けるけど、四十過ぎたらもはや書けないだろうなと思って思えるテーマが、あるはずでしょう。わたしが、今三十代で、かつ女であるという状況というか条件において書ける事柄を、きちんと書かねばって考えてるの」

「それは、賢明な捉え方だと思うよ」

秋野は、真剣な表情になって、諒子の言葉に頷いてみせた。

「今まで、君は、そのテーマを意識的に抑えてきたから、その用心深さを、そろそろ活かしてやらなきゃな」

「でも、まだ全く自信がないの。ただ、もし書いたとしたら、大きな荷物を降ろせた解放感は味わえると思う。身軽になって、その後、前へ翔んで行けそうな気がするの」

「そうなんだよ。書いて、一度すっかりもぬけの殻になるといい。その時、手許が空っぽになった感じがしても、時間が経てば、また新たに荷物を背負ってすることに気付いて、それから解放されたくなるもんだよ」

「はい、先生」

秋野の熱弁が教師調になると、時折、諒子はこんな反応をしてしまう。初めの頃、秋野は、

「先生なんて言うなよ」と抵抗を示した。この時は、緊張がほぐれた気配で、二人して軽く笑いあう。

会話を熱中しだすと、大概秋野のほうが能弁になり、その言葉つきも少しずつ説得の調子を帯びてくる。諒子は、時には頑固に反論したり、いつまでも首を傾げたりすることもあったが、最後には秋野の発想に巻き込まれていた。たやすく同調しない姿勢は保っていたが、それでも次第に秋野の論旨を納得し、それを受け容れることが多い。それというのも、二人の間の会話が、常に諒子の様々な問題について話し合うという形をとっていたからである。二人がかりで、実は、諒子自身のありようを検討しているという具合だった。そして、ほとんどむきになり、熱弁をふるいだすが、秋野のほうであった。諒子は、そんな秋野の自分へ向けた姿勢に、いつも感動させられ、幸福感を味わう。聴き入りながら、秋野への感謝といしさの思いに充たされる。同時に、秋野が自分に与えてくれる俸せは、これだけであり、この一点によって、二人が七年間結びついてこれたことを、彼女は充分に自覚してもいた。

秋野のグラスが空になっていた。

「お代わりしましょか。それとも、お茶、淹れる？」

諒子は席を立ち、グラスを取るため、秋野の傍に寄った。

「いいよ、もう」

秋野は、目の前にさし出された諒子の腕を掴んだ。それを引き寄せるようにして自分も立ち上がり、素早く諒子を抱擁した。諒子の背に回した両腕に力を籠め、首筋や耳朶を接吻しつづける。諒子は、今にも秋野が何か言いだすのを待つように、じっと耳を澄ましてみる。秋野は、無言の